

煙草

宮城県仙台第三高等学校 熊谷 孝太

「あの、すみません。」

え、何。声の主に目をやるとそこに立っていたのは自分より少し背が低い強面の男性。学校帰りに参考書をコピーしようとしようと立ち寄ったコンビニでのことだった。ガラスの自動ドアの外に見える黒の闇も相まって恐怖がかけめぐる。

「はい。」

「ライター、もってませんか。」

どういうことだ。今、私は知らない（それも怖そうな、年上であろう）男性から敬語でライターをせがまれている。状況処理が追いつかず、コピー機の上に置いた弁当袋に目をやる。一秒の沈黙。

「ごめんなさい。もってないです。」

「そうですか。」

男性は闇に消えた。謎の時間に驚きつつコピーを済ませて外に出ると、先程の男性と仲間であろう男性の二人が店の軒下で煙草に火をつけていた。

何故か煙草と私がつながる機会が増えた。あのコンビニ事件からそれほど経たない間にも、みどりの窓口で例の言葉が発せられた。

「御喫煙なさいますか？」

聞き間違いだ、と思っただし、思いたい自分がいた。出しそびれた学割証を渡したときの気まぐさといったら、そこから今にでも消えてしまいたいほどだった。

思い返せば煙草ではないにしろ、大人っぽい、とか、落ち着いている、とか言われることが多い人生だった。人と話すことが得意ではないから、教室では一人であることの方が多い。世間一般が思うであろう「青春を謳歌している男子学生」とは何かズレている中学高校生活を過ごしていることくらい、自分でも分かっている。し、諦めでは決して無く、それが自分らしいとも、どこかで知っている。

それにしても何かが違う、と感じる時がある。中学時代はそれなりに勉強も頑張っていて、いわゆる優等生で、生徒会の役員までやってのけた。でも高校ではそんなだぞ。まず学力が近い集団だから上位の常連ではないし、運動もダメ。唯一、文章を書くのは周りより好きであるうえ、褒められることも多い。たぶんクラスでも、あの熊谷という男は何か静かで大人っ

ぼくて頭も多分悪くはない、そして文才、とても思われている。それでも五時間目の古典の授業は格別に眠いし、赤点を取るし、どうでもいいことを考えたい時もある。たまに男子がしてるザ・思春期みたいな話だってちゃんと聞いている。もちろん、未成年だから煙草は吸わないし、酒も飲まない。

たしかに、自分がどう思われるかなんて関係なく全てが私であるけれど、ここまでも私の自分を表現できないのはつらいことだ。私だって、私だってみんなと同じ十八歳。あんまり印象で大人っぽいなんて言われてしまったら、ただでさえ固い殻はどんどん固くなるじゃないか！

新型コロナは五類になって、マスクの着用も自由だ。でも四月に私は誓った。「絶対に高校生活でマスクは外さない」と。マスクは顔パンツ、とは上手く言ったものだ。ここまでマスクが社会に浸透した中で、急にそれを剥がすのは多少の勇気が必要だった。こんなに周囲の目を気にしているのだから取れないのも当然。私以外にも周囲の目を気にしてマスクを取れないほどの人もいる、ということこそをコロナ禍は教えてくれた。

あと少しで高校という社会の縮図から飛び立とうとしている。少し怖い。これが私、という自分を表現することを避けて、周囲の印象で形づくられた自分を生きてきた感覚があるからだろう。現に私は「大人っぽい」と言われた時の反応に困っている。確かに外から見れば、だいぶ大人しい、老いているくらい静かな生活を送っている。でも自分の未熟な一面も、子どもな自分も、知っている。だから、「そんなことないですよ。」は違う。そんなことあるけどそんなことないのだ。こんなくだらないことを考えて、しばらくして、また自分は将来大丈夫なのか？という問いに帰着する。自分でも驚くくらい、大きな、得体の知れない不安の渦に襲われている。そしてこんなことを考えても仕方ない、なんて適当に心の奥に渦を押しやって、けりをつけている。

「大人っぽい雰囲気をさせてますね。」

「よくそう言われたりするんです。ありがたいことに。でも実はそんなこと無かったりもするんですよ。」

「すみません、ライターもってますか。」

「もってますよ。どうぞ。」

「喫煙なさるんですか？」

「しないです。というかまだ未成年なんです（笑）。そんなに吸ってそうに見えますか？煙草が似合う男性って格好良いなっとは思いますが。なので吸ってます？って言われるのちょっと嬉しいです。吸いませんですけど。」

これが十八歳の今の私の最適解。どう思う。未来を生きる私の最適解は何？教えてほしい。